

山口まちづくり推進協議会だより

さわやか

特 集 号

行ってみよう 山口の自然と歴史 もっと知ろう！



みどりと水鳥の里

YAMAGUCHI

平成29年3月31日
山口まちづくり推進協議会

はじめに

日頃、山口まちづくり推進協議会広報紙「さわやか」を御高覧いただき、ありがとうございます。

昨年（平成 28 年）の第 58 回山口地区文化祭で「山口の自然と歴史」のシリーズ①から⑱までをパネル展示したところ、多くの方から一冊にまとめて欲しいという声が寄せられ、広報委員会では特集号を発行することにしました。当初はシリーズ①～⑳だけの掲載を考えていましたが、それならばこの際ということで、「山口の自然と歴史」連載のきっかけとなった山口民俗資料館勉強会の紹介記事や、山口の伝統文化である岩崎彫獅子舞の紹介記事もいっしょに掲載することにしました。

本特集が、山口の自然と歴史を知り、ひいては山口に対する愛着を深めるきっかけとなれば幸いです。

行ってみよう 「山口の自然と歴史」 もっと知ろう！

シリーズ① 行ってみよう 山口の自然と歴史 もっと知ろう！

私達の住んでいる山口地区を題材に、取材形式の連載シリーズ「行ってみよう、もっと知ろう！」が始まります。

さーて、どこから行こうか？・・・その前に先ず山口の地名はどうして山口とついたのだろうか？「正しくははっきり知りたいなー」「そんなの簡単、簡単」市役所か山口民俗資料館に行けばわかるのでは！では行ってみようと言うことで、山口民俗資料館を訪問し、石井清一館長よりお話を伺いました。

この地域は狭山丘陵を水源とする柳瀬川の上流部に位

置し、水の便に恵まれ、古くから人が住みついていたそうです。地形的に「山の口」の意と思われ、明治8年の6村合併で新村名「山口村」として採用されたそうです。地形の特徴が地名の起こりになったのです。「納得」。さて、湧水に恵まれた当地は江戸時代後半から織物が盛んになり「所沢紺（かすり）」というブランドが生まれます。 **この続きは次号で紹介。**



自作の山口「立体地図」を使って熱く語り、説明される石井館長



「かすり織」の見学体験は毎月第1日曜日（午前10～午後3時）



消防用具は「時代劇」で見るのと同じで「ビックリ」、保存も充実
第2号（平成25年10月31日発行）

シリーズ② 行ってみよう 山口の自然と歴史 もっと知ろう！

前号に引き続き山口民俗資料館の紹介です。今回の訪問取材は全国的に有名になった「所沢飛白（かすり）」の再現指導にあたられている、宮本八重子先生に実演を見せて頂きました。紺地に白く抜かれた模様が特徴でとても繊細で美しいものです。中国の書体の一つで「飛白体」に似ていることから商標に使ったそうです。「なるほど納得です。」

山口地区で織物が盛んだった頃は、あちこちから「トンカラリン」と響きのいい音が聞こえ、織物の生産で暮らしを支えていたそうです。各地域で織られた「所沢飛白」は、八王子方面や多量需要の江戸方面へ流通され、丈夫で柔らかく着心地がよいことで広まっていったそうです。

さて話は変わりますが、その昔、山口地区には鎌倉街道の主要幹道の一つである上道（かみつみち）が通っていました。民俗資料館の木村さんにお話を伺い、行ってみました。図書館（椿峰分館）で資料を見たり伺いながら歩きましたが、なかなか道が特定できませんでした。しかし、懐かしさを感じることができました。ぜひ再チャレンジしたいと思います。何方か詳しい方ご指導ください。皆様も民俗資料館でお話を聞いたり、自分の地域の歴史を感じて歩いてみましょう。



会話と手先は休みなく宮本八重子先生（中央）



「飛白織」の皆さんと民俗資料館スタッフ
第3号（平成25年12月25日発行）

シリーズ③ 行ってみよう 山口の自然と歴史 もっと知ろう！

興味深い山口地区の『地名由来』について

狭山丘陵の谷戸に広がる山口地区には興味深い地名が残っています。その由来はどうなっているのでしょうか？ 結構手ごわい課題ですが、皆様にお伝えすることが出来るか、挑戦してみました。

中世以来の村落は、狭山丘陵の谷間や、柳瀬川などの小河川が台地を削って低い崖を形成しているあたりに散在し、いくつか集まって「郷」といわれていたそうです。

徳川氏の関東入国により家臣たちに知行が与えられ、「郷」が分割され、近世村落「村」の原型が成立し、年貢や夫役を提出する単位「村切り」により村の範囲が確定されました。天正19年（1591年）～延宝6年（1678年）の約87年間にわたり山口の各村々では検地が繰り返されました。

徳川幕府が編さんした「新編武蔵風土記稿」には、安松郷（坂ノ下・城・本郷・安松・所沢）を含む大きな地域と久米郷・山口郷・宮寺郷などが記されており、現在でも「武州入間郡山口郷菩提木村」など、「道しるべ」に刻まれたものを確認することが出来ます。（次号へつづく）

次号では、菩提樹や岩崎など、江戸時代前期の各村々の名称についてご紹介します。

第4号（平成26年2月28日発行）

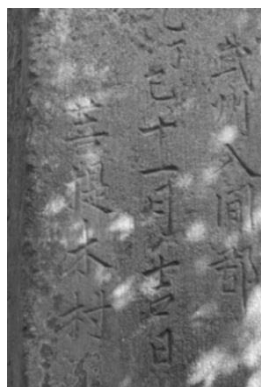


参考：所沢市教育委員会（平成19年）『ところざわ歴史物語』

シリーズ④ 行ってみよう 山口の自然と歴史 もっと知ろう！

興味深い山口地区の『地名由来』について その2 「菩提樹」と「岩崎」の由来を紹介します。

「菩提樹」の地名は、村内に菩提樹の大木があったためと伝えられています。見づらいですが、「菩提木村」と刻まれた「道しるべ」（右写真）も残されています。この伝承を受け、翁樹神社境内に「名木菩提樹」が残っています。ぜひ一度訪れてみては如何でしょうか。



「岩崎」の地名は、狭山丘陵の大きな3つの尾根の北東端に位置し、丘陵の「岬」の意で言われたという説があり、荒幡方面から展望するとよく解ります。ロマンチックですね。



荒幡小の近くから望んだ現在の「岩崎」、左側に見える建物は泉小、やや離れて右側に見える木立は瑞岩寺です。

次号では、堀之内、打越などの地名由来についてご紹介します。

第5号（平成26年4月30日発行）

シリーズ⑤ 行ってみよう 山口の自然と歴史 もっと知ろう！

興味深い山口地区の『地名由来』について

その3 「堀之内」、「打越」、「氷川」の由来を紹介します。

「堀之内」は、鎌倉時代に行われた山口城の規模拡張の際、外堀とした六ッ家川の内側に位置したことに由来する旨が、八雲神社境内の石碑から読み取れます（右写真）。三ヶ島にも同地名があるので、「山口堀之内」と頭に「山口」をつけて区別することもあり、山口城の縄張りに関わる地名と言われています。

「打越」は、鎌倉街道のひとつである小手指道が狭山丘陵を越えていく場所に立地しており、どこへ行くにも尾根を「越えて行く」ところから名付けられたそうです。なるほど納得できます。

「氷川」は、氷川明神と呼ばれた山口中氷川神社に由来したものです。皆さんよくご存じの武蔵一宮氷川神社（さいたま市）の分社です。

次号では、町谷、川辺などの地名由来についてご紹介します。



堀之内の八雲神社境内にある石碑

第6号（平成26年6月30日発行）

シリーズ⑥ 行ってみよう 山口の自然と歴史 もっと知ろう！

「町谷」は「町屋」と書く場合もあったそうです。山口城の城下にあたり、その「町屋」が並んでいたところから名付けられたといわれます。何時頃、なぜ「屋」が「谷」の表記に変わったのか興味ある所ですが、「町屋」と書かれた石仏や碑など探しても見つけれませんでした。

山口城は1590年に滅城したことから、その後ではないか？ 町谷に多い粕谷・糟谷姓は、もしかして「屋」を使った時代があったのでは？ と考え、ほのかな期待を抱き、古い墓主の方に尋ねたところ、確か見た記憶があるとのこと。調査に同行、風化し苔むした墓石を洗っていくと「糟屋」と刻まれた苗字（写真右）が現れ、年号は天和三年（1683）であることが確認できました。



墓石から読める「粕谷」と「糟屋」

さらに、ご夫婦であったと思われる隣の墓石には「谷」、宝永七年（1698）（写真左）と刻まれており、約15年後には「屋」⇒「谷」と表記されていたことが確認できました。まさに「感動の瞬間」であり、「静かに大喜び！」しました。おおよそこの頃から「糟谷・粕谷」姓と地形的な理由から「谷」の字が使われ始めたと思われます。

調べれば調べるほどいろいろなことが分ってきます。続きは次号で紹介します。

第8号（平成26年10月31日発行）

シリーズ⑦ 行ってみよう 山口の自然と歴史 もっと知ろう！

8号では、「町谷」と「町屋」、「糟谷」と「粕谷」について紹介しました。右は、前回、掲載できなかった町谷の旧道にある「町谷村」と刻まれた石塔の写真です。

今回は、「糟谷」と「粕谷」の続きです。

相模国から武蔵国、入間を本拠とし威勢を振るった糟谷三郎兼時が居住した世田谷に粕谷とか伊勢原市に粕屋・糟屋とかの地名が存在します。参考迄に「上粕屋」は北方位・「下糟屋」は南方位と区別している様子が地図から読み取れます。

また、地名「糟屋」は平安時代後期より「糟谷」と長く併用され、粕屋姓から⇒粕谷姓に派生した要因であったようです。鳥羽上皇が建立した安楽寿院の荘園は「糟屋荘」と称されています。尚、埼玉県の春日部は「粕壁」と表記していたもので米に関係していると伝えられています。

次号では川辺について紹介します。



「山口町谷村」と刻まれています

第9号（平成26年12月26日発行）

シリーズ⑧ 行ってみよう 山口の自然と歴史 もっと知ろう！ - 川辺 -

多くの歴史書によると、「川辺」の地名は、柳瀬川の流れに沿って東西に家屋が並ぶところから付けられたそうです。小字名の例ですが、下道端（旧上山口村の東端）、中道端、上道端（旧川辺村の西端）や川向（かわむかい、旧川辺村の集落から見て川の向こう（南）側という意味で、地形や地域の特徴が地名になっていることがよく解ります。

高橋交差点近くにある川辺公民館で、本柳町内会長と地元詳しい森田仁さんに話を伺いながら、同敷地内にある八幡宮を見せていただきました。そこには、「山口領河部鎮守・千門（ちかた）大明神」と記された石塔があり、由来は、なんと承平天慶（じやうへいてい）年間（935～940）で平安中期関東地方戦乱の頃、「平将門の乱の落ち武者が当地で生々しい血刀をひっさげ立往生し、最期を遂げた」とあります。里人は戦死者を手厚く葬り、血刀と鎧を埋め、その上に血刀明神として祀り、「チカタ明神」とも書き、この地の小字を「チカタ」と言われるそうです。血刀→千刀→千門と改称、後に川辺明神と改め、さらに八幡と改称し、この地の鎮守として祭られていますが、なぜか祭神は不詳で、謎めいています。（江戸末期の歴史学者 杉本林志（すぎもと りんし）著『狭山之葉』（やまのは）により残されたもの）



石碑の裏には由来が書かれています

次号では、驚きの歴史が眠る川辺地区の続きを紹介します。

第10号（平成27年2月28日発行）

シリーズ⑨ 行ってみよう 山口の自然と歴史 もっと知ろう！－川辺（続き）

続いて狭山三十三観音札所四番「正智庵」へ向かいました。椿峰丘陵への狭い参道を上がって行くと、今にも朽ち果てそうな百日紅（ササバ）の大木と小さな庵が目に入ってきます。庵には石像が三基あり、中央に本尊十一面観音が鎮座しています。ここも川辺地区で「武州入間郡上山口村」と刻まれた石碑があります。敷地奥の崖下に今にも埋もれそうな墓誌と碑があります。苔むして気付きにくく、見落とすところでした。刻まれた文字から読み取れるのは下記です。

早世 庵幻嘉童女 一〇幻瞬童（以下地中埋没）

寛永〇年七月十三日 長田十〇〇〇（以下地中埋没）

〇の文字は風化読み取り困難のため、市生涯学習センター「ふるさと研究」の方々に調査をお願いして解読頂きました。一〇は漚⇒読みは「おう・ひたす・あわ」のいずれか、どのような意味を持つのでしょうか？ 何方が誰に何のために残したのか？ 好奇心が掻き立てられます。

この文字を頼りに郷土史や歴史書を調べる日々となり、深夜に至ること度々でしたが、ついに関連文書にたどりつきました。 **この続きは次号へ。川辺の地名などが出てきます。**



ひっそりとたたずむ正智庵

第11号(平成27年4月30日発行)

シリーズ⑩ 行ってみよう 山口の自然と歴史 もっと知ろう！川辺（その3）

新編武蔵風土記稿によると、「川邊村（かわへ）」は八幡山と号す、本尊十一面観音を案ず、此所へ庵を結びはじめし僧「白瑛」（読みは⇒はくえい、またはびやくえい）創建と云う、寛暦七年七月十三日寂す、（1757年に当たる。「寂す」は身分の高い人が死去するの意）、とあります。

しかし、前号で紹介した「早世 庵幻嘉童女 一漚幻瞬童」の碑に刻まれた年号は寛永（1624～1644）であり、徳川時代初期のもの、正智庵創建よりもはるかに古い時代の建立です。この時代に、早くして世を去った童女の霊を慰める石碑を建てることには、大変な意味があったと思われます。

その後、市生涯学習センター「ふるさと研究」の皆さま方の調査ご協力のお蔭で、碑の建立者は長田十右衛門（初代）で幕府旗本であることが解り、少し謎が解けたような気がしました。

次号へ続く。次号では、長田十右衛門と正智庵の関わりを紹介します。



よく見ると「長田」の文字が

第12号(平成27年6月30日発行)

シリーズ⑪ 行ってみよう 山口の自然と歴史 もっと知ろう！川辺（その4）

江戸に住み川辺村を知行していた「長田十右衛門」は、三河出身の幕府旗本で、3代にわたり同姓を名乗っていたそうです。この地の正智庵が劣化破壊したとき、村方からの願出として、入間郡山口村勝光寺（現在の堀之内勝光寺）より幕府長田十右衛門様御内郡司茂右衛門殿中原安太夫殿へ宛てた「勝光寺文書」が残っています。

「取立てにつき一札」指上申一札之事・・・（中略）で始まる「勝光寺文書」には、「川部村」の地名があり、また、拙寺「証智庵」について「一札如件」寛暦十年（1760）辰正月とあります。このとき、正智庵創建の僧「白瑛」寂の3年後にあたります。

早くに世を去った童女の霊を慰める石碑を発端に、謎に包まれた歴史に触れ、様々なことを学ぶことができました。初めは解らないことが多く、現存する碑や墓石などに刻まれた読みにくい文字言葉を調べ、歴史書や知人に学びながら書きとめました。不明点などはお許し頂きたく、さらにご教示をお願い致します。

このあたりで「川辺」を後にし、「堀口」へ足を運びました。（次回堀口です。）

※幕府へ宛てた「取立てにつき一札」指差上申一札之事、全文はスペース的に掲載できませんが、興味のある方は山口まちづくりセンター事務局へお問合せ下さい。 → **特集号では次のページに載せました。**



ここに正智庵があった証として建立された石碑

第13号(平成27年8月31日発行)

【参考】

■証智庵御取立て文書（市史）より

＜川部村 勝光寺より幕府旗本 長田十右衛門／郡司／中原殿へ宛てた願い状＞

宝暦（1751～1764）十年正月 証智庵取立てにつき一札（社寺編）

指上申一札之事

拙（ツツイ）寺持証智庵古来引川部村（カハム）御座候慮、相續成兼破壊仕候、右之通古来引拙寺持二面相違無御座候、此度村方引相願之通右拙寺証智庵御取立被下置候様奉願候、右庵之儀二付新寺沙汰基外何様御座候共、拙寺引請何方迄も罷出（マカデ）申請可仕候、仍而（ヨッ・ナ）（カシ）

一札如件

宝暦十年辰正月（1760）入間郡山口堀内村 勝光寺

長田十右衛門様御内 郡司茂右衛門殿 中原安大夫殿

（勝光寺文書）

文責：広報委員会、（ ）内は広報委員会追記

シリーズ⑫ 行ってみよう 山口の自然と歴史 もっと知ろう！堀口（その1）

『堀口』の由来は、柳瀬川の源として、ひとつの水源は多摩郡横田村に発し、他の水源は同郡殿ヶ谷村と入間郡矢寺村の溪谷より発し、二流れ共、勝楽寺村を経て当地で1本に合流して柳瀬川となることから、堀口と名付けられたと云われます（現在狭山湖の湖底となり見ることは出来ませんが歴史ロマンを感じます）。

天正19年5月3日（1591）家康公による知行宛行状（井・ヨリガ・イ・ヨリ）によると久松彦左衛門忠次が堀口と三ヶ嶋之村を知行し、200石のうち堀口村は147石を負担したそうです。水に恵まれ、稲作にすぐれた地だったことが解ります。ちなみに、歴史書によると殿ヶ谷とは殿屋敷跡なればこの名あり、小字名は殿ヶ谷となり昔、地頭久松氏が住んでいたが、慶長年間に江戸に移ったと記されています。

この地は深い歴史に包まれていることから、現地取材を計画、堀口自治会の中村典之会長さんをお願いして、地元詳しい4名の方々（中村豊、齋藤重雄、中村治夫、粕谷宇平の各氏）にお集まりいただき（H27.1.16）、自治会館にて、現在ある資料、明治時代の地図や歴史書などにより堀口村の様子について語り合いました。

その後、清照寺や堀口天満宮周辺を案内頂き墓誌や供養塔、石碑に記された事柄から当時何があったのか意味を確認しながら散策しました。貯水池建設での変貌、現在あまり知られてない地名、小字名の云われなど歴史話で盛り上がりました。 **次号に続く・・・取材で解った興味深い点についてご紹介します。**

第14号（平成27年10月31日発行）

第13号は編集の手違いで飛ばしてしまいました。

シリーズ⑭ 行ってみよう 山口の自然と歴史 もっと知ろう！堀口（その2）

水源に恵まれた堀口は米の収穫量では山ローでしたが、度々の水害に遭遇したことから、家の蔵には用心のため小舟があったそうですが本当ですか？「実際にありましたよ！ 近年、小舟を確認しています。下流の村では川の氾濫があったそうです。水に濡らしてはいけない家財など小舟に積み、避難していたそうです。貯水池建設後、水害は無くなりました。」昔の蔵を解体時、小舟や鉄砲（火縄銃）が見つかったことを聞きますが、猟をしていたのでしょうか？「考えられますね。」柳瀬川流域の古い家々を訪ねましたが小舟は処分され現存しませんでした（残念）。「もし古い民具や記録、書など、ありましたら、山口民俗資料館か山口まちづくりセンターへご一報下さい。」

話は変わりますが、平将門の家来で落ち武者「野崎氏」が村境の目印として植えたと云われる「榎」（イナ）があった場所は解りますか？「字名は『榎戸』（イナド）、番地は上山口498～520で、『狭山之葉』（ヤマノハ）によると高札場や庚申塔があったそうです。」どのあたりか、聞いたことはありませんか？「聞いたことはないが、元湖畔荘があったあたりではないでしょうか。」「確かに高台だね。」「野崎姓」を名乗る方はいませんでしたか？「貯水池ができる前は、居住していたと聞いています。」その方は子孫でしょうか？「以前、錆びた刀や兜があったと伝えられているそうです。」もう少し堀口から三ヶ島境のあたりを歩いてみることにします。

さて次号は・・・久松氏の墓や清照寺、そして天満宮について紹介します。

第15号（平成27年12月25日発行）



清照寺からの眺望



森林に包まれた堀口天満社

シリーズ⑮ 行ってみよう 山口の自然と歴史 もっと知ろう！堀口（その3）

当地の地頭「旗本久松氏の墓」は、清照寺本堂の裏手、歴代住職の墓域内にあり、向かって左側が久松定佳（サダキヨ）、右側が定佳の二男定弘（サダヒロ）の墓石で、二基が並んで建っています。定弘の墓は、墓石の刻銘から定弘の養子となった定持（サダメチ、妻は定弘の娘）が建てたものと判ります。

久松氏が武蔵国入間郡山口に二百石の知行を与えられたのは、天正十九年（1591年）、定佳の父忠次（タダツグ）の時です。定佳は、慶長五年（1600年）から徳川家康に仕え、元和二年（1616年）武蔵国比企郡に三百石を賜り、父の采地と合わせ五百石を知行します。大名旗本諸家の家譜を記した『寛政重修諸家譜』（かへいしゆしゆかふ）によると、久松定佳は万治二年（1659年）十一月十日に死没、定弘は貞享四年（1687年）十月二日に死没し、両人とも入間郡堀口村の清照寺へ葬られました。なお、定佳の長子の定延（サダノブ）も父と同じ葬地に葬られたと記されていますが、現在、定延の墓石の存在は不明です。

寺伝によると、清照寺は武蔵七党の一つ村山党の末裔といわれる星見小太郎が室町期に建てた持仏堂（星見堂）に始まり、後にこの地を知行した久松忠次が、東谷にあった安楽寺を勧請して菩提寺としました。もとは旧山口村堀口の別の場所にありましたが、山口貯水池（狭山湖）の建設に伴い、昭和5年に現在地に移転されたそうです。

「旗本久松氏の墓」は、江戸時代初期に所沢市域を支配した旗本の地方知行の実相を示す貴重な資料です。清照寺境内には、所沢市教育委員会作成資料（掲示板）があります。ぜひご覧ください。

次号は堀口から三ヶ島への道、素晴らしい自然と眺望が楽しめます。

第16号（平成28年2月29日発行）



旗本久松氏の墓

シリーズ⑯ 行ってみよう 山口の自然と歴史 もっと知ろう！堀口（その4）

天満宮を越え堰堤から三ヶ島への道があります。確かに小高い丘があります。このあたりが高札場だったのでしょうか。少し行くと古道があり、三ヶ島になります。寛政や天保年間の墓石や地蔵があります。『狭山之栞』（サヤマノサキ）※によると村の境目を示す「野崎氏」が植えたといわれる榎（Iノ）を探し求め約2時間さまよいましたが、見つけれませんでした（残念！どうなったのでしょうか）。地元の方のお話では自然消滅したと伝えられます。あたりには「もみじ」の古木があり、しかも配列よく植えられた感じで、ひょっとして庭園だったとか思いたくなりました。（※）『狭山之栞』とは江戸時代の歴史書）

「天神天満宮の再建」について、数百年前より根古屋旧城跡の東端、老古杉の景勝地天神山の上に鎮座していましたが、貯水池の起工により、氏子が熟議したところ、神域を現在地に定め、昭和6年9月25日現在地に移築創建されました。村人の寄付や協力など記された石碑があり、素晴らしい歴史に出会えます。

また、堀口自治会館周辺は昔、大町と呼ばれ、堀口の中心であったようです。県庁「熊谷」へ十三里と歴史書に記されている「堀口の起点」となった場所はどこに残っているのでは？と、あたりを探してみましたが判りませんでした（湖底あたりではないでしょうか）。

天満宮と清照寺あたりは、深い森にかこまれ、自然と歴史に触れることができます。湖畔に立てば、湖底に沈んだ堀口組の一部65の家々や夫婦川、そして堂谷津池など想い浮かべ、暮れゆく富士山や南西部の眺望を楽しみながら家路につきました。歴史と自然を堪能できる素晴らしい堀口でした。ぜひ散策してみても如何でしょうか。 **次号から大鐘です。新たな発見や気が遠くなる昔を探ります。・・・お楽しみに。**



暮れゆく狭山湖（中央より右は旧堀口村）

第17号（平成28年4月30日発行）

シリーズ⑪ 行ってみよう 山口の自然と歴史 もっと知ろう！大鐘 その1

『大鐘』という地名は村内の塚から大きな鐘が掘り出されたことに由来し、その鐘は金乗院（山口観音）に移されたと伝えられますが、現在は残っていません。色々な歴史書にもどうなったか不明と書かれ、ロマンがあると結ばれています。どこに行ったのでしょうか？ 大変興味深いものです。地名の由来云われの殆どは、誰にでも解りやすく地域を特定できるような特徴などから名付けられていますが、「大きな鐘が出た」という出来事が地名になるのは珍しいことです。これを調べるのはかなりの労力が必要で、途方もない課題ですが、解らないことは訪ねて聞くことが基本、「現物・現場から学び、考えてみるという」精神で挑戦。先ず、大鐘という地名はいつ頃からついた？ 時代の特定しほりこみが必要です。古文書や関係書を調べ、そしてなぜ「鐘を土中に埋めた」のでしょうか？ 鐘が発見された場所や伝わることなど、手がかりを求め、解らなくて元々！ と大鐘地区に代々住む歴史に詳しい町田源一さんを訪ねることから散策調査を開始しました。



馬頭観世音菩薩(大鐘旧道)

大鐘村の銘

何度も現地を訪れた時、古道(旧道)の脇にある苔むした石塔に気づき、よく見ると、なんと「馬頭観世音菩薩」大鐘村と刻まれていました。すなわち、石塔に大鐘村と刻まれていることは、それ以前に大鐘村は存在したことになります。新たな事実確認です。(石塔の写真)

現在残っている古道(旧道)の、大鐘橋付近から西側は狭山湖堰堤に続きます。今は湖底に沈んだ「勝楽寺村」との境で隣り合わせです。「山口郷土民俗資料館」で古地図や地形をはじめ、村の成り立ちなど、同時に調査、勉強を開始しました。(皆様もぜひ一度訪ねてみては如何ですか)。

次回は古道や暮らしについて解ったことなどをご紹介します。お楽しみに！

第18号(平成28年6月30日発行)

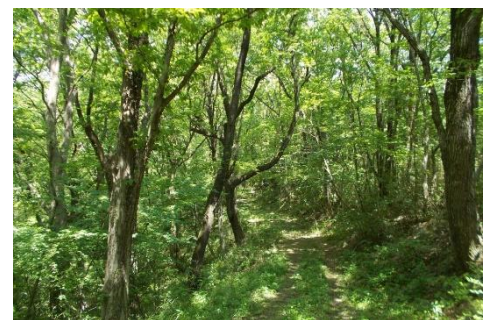
シリーズ⑫ 行ってみよう 山口の自然と歴史 もっと知ろう！大鐘 その2

大鐘地区は柳瀬川の最上流に位置し、現在でも田んぼが残っていますが、稲作が盛んだった江戸時代の初期はどうだったのでしょうか。天正 19 年 5 月 30 日(1591)家康が定めた、知行宛行状(キョウワガ イヨウ)によると、地頭 武蔵孫之丞秀貞 250 石(山口之内大鐘村 95.4 三ヶ嶋村之内 106.9 山口新井村 47.6)とあり、大鐘村は豊富な米の産地であったことが分ります。

一方、勝楽寺村は地頭の 糟屋与兵衛 200 石(箱根ヶ崎・村山之内殿ヶ谷)とありますが、謎が多い人物で途中 国替、家康に仕え日光東照宮をみた説もあるが定かではありません。勝楽寺村に着任していた糟屋新三郎勝忠という人は、相模の出身で北条氏に仕えていましたが、北条氏滅亡後は徳川氏に仕えました。「寛政重修諸家譜」には記載がありませんが、勝楽寺に土着して、織物、農業などの振興に功績をあげたとされています。(糟屋家の祖先ではないかと思われます)。

米や織物、物資の流通路は、大鐘、勝楽寺を通じ、南西は武蔵村山中藤、横田、青梅街道や日光街道、北東方面は新堀、所沢、川越、江戸とつながっていました。暮らしの連絡道が開かれ、往来が盛んになるにつれて、狭山丘陵を超える南北の道は「山口街道」と呼ばれたそうです。

山口の沿道には荷物を運ぶ馬や農耕馬を供養した馬頭観音塔などが数々みられます。かつては、旅人や馬方さんのお休み処「山口街道」(ヤグ 杉ト-と呼ばれた)という酒屋があり、好みの茶碗酒や飲み物を買ひ、竹筒に入れて峠越えをしたそうです。



勝楽寺への道

江戸初期には、既に大鐘村という地名は存在していました。調べを進めると色々なことが解ってきました。

次回は鐘を探る、なぜ埋めたのか？ 延久の鐘(1071) 平安・鎌倉以前にさかのぼる！

第19号(平成28年8月31日発行)

シリーズ①⑨ 行ってみよう 山口の自然と歴史 もっと知ろう！

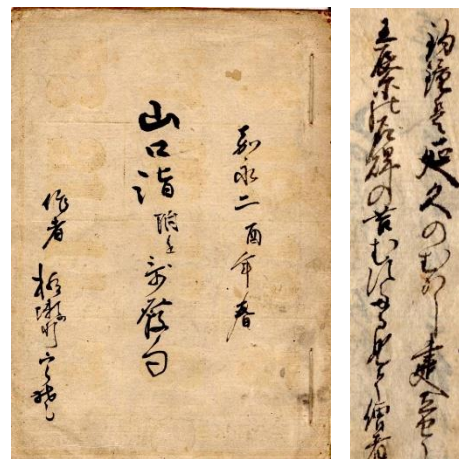
大鐘 その3 <梵鐘と勝楽寺仏蔵院>

祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり。この世にない妙音を発する鐘の音に祈りをささげる除夜の鐘や、庶民に時を知らせる「花の雲 鐘は上野か浅草か」芭蕉の句、のどかな下町の様子が伝わります。

鎌倉や室町時代にはこんな話があります。三年間土中に埋めておけば人が突かなくとも定時に鳴る鐘の話があったそうです。鋳物師は三年間待つようにと言い渡したが、寺の別当が我慢できずに期日前に掘り出してしまふ。もちろん鐘は鳴らなかったとか。水中や土中の発掘記録や伝承があるそうです。鐘に特別の力が備わるという思想があり、自然界にない神秘的な金属音を出す鐘は、土中や水中の異界とこの世をつなぐ霊的な力があると中世の人々は考えたようです。

さて、伝説によると霊亀二年（716）高句麗からの一族が武蔵国に移住した時、自国より持参した鐘が現在の大鐘の地から堀出されたものか、あるいは辰爾山（ソニサ）勝楽寺仏蔵院に伝わる延久三年（1071）の銘がある鐘なのか、掘り出されたのは明確でないが、この「延久の鐘」は大変興味深いものです。文永三年（1266）に火災にあい、応永年間に再建後、戦火に再び遭遇しひどく割れたが、明暦三年（1657）補修のため再鋳造された後、勝楽寺仏蔵院の鐘楼より降ろされ、しばらくそのまま置かれていたそうです。

嘉永二年の春（1849）作者「柳瀬の川うそ」著「山口詣で歌と発句」と称する散策記（町田源一氏 所蔵）を拝見した折、仏蔵院勝楽寺の鐘楼「延久の鐘」に触れた記載があり、鐘楼に吊り下げられていたとありました。年号も延久と書かれています。直に歴史に触れた瞬間で、新たに知る喜びと驚きを感じました。



柳瀬の川うそ著「山口詣で歌と発句」の表紙と延久の釣鐘部分資料

次号に続く。大鐘が掘り出されたことや「延久の鐘」の拓本などをご紹介します。

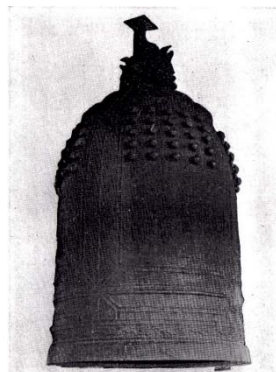
第20号（平成28年10月31日発行）

シリーズ②⑩ 行ってみよう 山口の自然と歴史 もっと知ろう！ 大鐘 その4

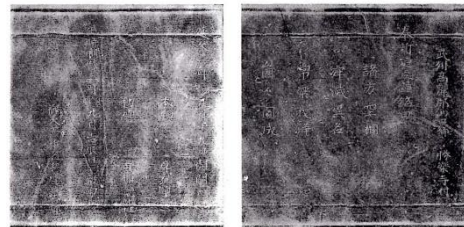
勝楽寺村の仏蔵院にあった「延久の鐘」はどうなったのでしょうか？大鐘が掘り出されたとして江戸時代の『狭山之栞』（サマツナリ）に紹介されている「今鐘塚」の跡などを調べることにしました。大鐘を知るには、隣の勝楽寺村（今は湖底）を知る必要があるのですが、現在の仏蔵院の竹中住職にお話を伺い、また、武蔵村山市側から見た山口の歴史も調べました。

紙面の関係で全ては掲載できませんが、その一部をご紹介します。大鐘村の地番、全てが記録されている戸別割り古地図からすると、現在の竈（カド）神社は勝楽寺村との境にありましたが、貯水池建設のため現在の地に移されました。大鐘が掘り出された場所は六斎堂の西方で現在の竈（カド）神社の東方あたりと（今は亡き地元の方が書き残した栞（サ））で確認しました。延久時代は朝廷の命令で「里から郷」に変わった時で、大鐘の地名もこの頃につけられたと思われます。「延久の鐘」に刻まれた銘には武州高麗郡山口郷勝楽寺村とあります。拓本の一部を拡大すると火災でのひび割れ補修跡も確認できます。なお、願主は「藤原重信」となっていました。

さて、勝楽寺仏蔵院の移転と共に移された梵鐘は鐘楼にありましたが、昭和19年大戦のため供出される運命をたどりました。遠い歴史を見てきた「鐘」とのお別れでした。鐘楼の前で関係者最後の記念写真が残されています。これを見た瞬間言葉を失い、一瞬熱いものを感じました。翌昭和20年には年々妙音を響かせていた山口観音金乗院にあった安永2年（1773）の梵鐘も供出となったことも加えておきます。



梵鐘（佛蔵院）



同鐘銘（拓本）

大鐘には数々の歴史が未だありますが一区切りとし、次号は「新堀」です。お楽しみに！

今回充分掲載できなかった「山口詣で歌と発句」（嘉永2年春（1849）柳瀬の川うそ著）の資料展示や解説勉強会などを「山口郷土民俗資料館」と共催企画予定です。

第21号（平成28年12月28日発行）

ささら 岩崎 簞 獅子舞

「岩崎簞獅子舞」は古くから伝わる山口の伝統文化、所沢市の無形民俗文化財にも指定されています。「さわやか」では、次世代の子どもたちに伝えられていく様子も紹介しました。

起源伝承400年 「岩崎 簞 獅子舞」

山口の伝統芸能の一つであり、所沢市の無形民俗文化財に指定されている「岩崎簞獅子舞」が10月11日（土）に瑞岩寺の境内で行われます。

今からちょうど400年前の慶長19年（1614年）に岩崎の地頭宇佐美助右衛門が大阪冬の陣から帰る途中、京都で三頭の獅子頭面（龍頭面）を購入しました。そして、獅子舞の師匠とともに岩崎に戻り、村の若者たちに稽古をさせたのが始まりとされています。以後、岩崎地区で代々伝統を受け継ぎ、現在に至っています。

今年は400年を記念して泉小児童による「子ども獅子舞」が披露されます。

披露の時間は、当初の予定より変更になり、「記念式典」が13:00から、「子ども獅子舞」が13:30から、「岩崎簞獅子舞」400年記念披露1回目が13:50から、2回目が15:00からの予定になっております。

詳しくは所沢市ホームページ；「岩崎簞獅子舞」起源伝承400年記念事業」をご覧ください。山口まちづくりセンターでも10月5日（日）～12日（日）の間、1階ロビーにて写真展示を予定しております。

第7号（平成26年8月31日発行）



牝獅子をめぐる2匹の牡獅子の争い、さて結末は？

祝 起源伝承400年 岩崎簞(ささら)獅子舞

10月11日（土）、所沢市無形民俗文化財指定の「岩崎簞獅子舞」が瑞岩寺境内で行われました。（主催：岩崎獅子舞保存会、後援：所沢市、所沢市教育委員会、所沢市観光協会、山口地区自治連合会）今年は起源伝承400年の節目にあたります。

獅子舞の披露に先立ち、藤本市長をはじめ多くの来賓を迎えた記念式典が行われました。また、400周年を記念して泉小児童による「子ども獅子舞」も披露されました。

境内を埋め尽くした大勢の人達は、かわいらしい簞子（ささらっこ）や勇壮な獅子の舞に見入りました。



次の世代に伝統を伝えます



境内は多くの人で埋め尽くされました

第9号（平成26年12月26日発行）

子どもたちに伝える山口の伝統文化 泉小で岩崎獅子舞保存会の名人たちが 簞 獅子舞の授業

岩崎に古くから伝わる簞獅子舞（所沢市無形民俗文化財指定）は、毎年10月第2土曜日に瑞岩寺境内で行われ、昨年は起源伝承401年を迎えました。棒使いや簞子（ささらっこ）を舞うのは子どもたちです。

泉小では、5年前から「総合的学習 名人に学ぶ」として、簞獅子舞を授業で取り上げています。今年度は12月16日（水）に、13名の岩崎獅子舞保存会の人たちにより4年生全員を対象とした授業が行われました。子どもたちは体育館に集まり、簞獅子舞の歴史や所作の話を聞いたり、名人の舞を見たりしました。また、実際に簞の音の出し方や棒の使い方も教わりました。2時間45分に及ぶ長い授業でしたが、子どもたちは飽きることなく熱心にメモを取ったり、体験に参加していました。山口の伝統文化は、学校でも子どもたちに伝えられています。



名人の舞に見入る子どもたち

第16号（平成28年2月29日発行）

岩崎鯨獅子舞 絵画が寄贈されました

今年の岩崎鯨獅子舞（所沢市無形民俗文化財指定）の奉納は雨天のために1日延期され、10月9日（日）に行われました。会場の瑞岩寺境内は来場者で溢れ、皆、勇壮な獅子舞に見入りました。それに先立ち、狭山市在住の画家、福岡紀幸氏から岩崎鯨獅子舞を描いた水彩画が山口地区に寄贈され、9月29日にまちづくりセンターで岩崎獅子舞保存会の山田佳生会長へ手渡されました。



福岡紀幸氏(右)から山田佳生会長へ

第21号(平成28年12月28日発行)

【参考】

舞の順序

(一) 街道下りの曲

行列を整え山伏のホラ貝の合図で舞場に向かう。笛の音が後曲に入る頃、獅子が舞場に入り始め、最後に大獅子が入り舞場の入口は閉められる。

(二) 初めのトーラリーの曲

ヒーワンワン、トーワンワンの曲の音につれて縄追いと牝獅子は、舞いながら中央に進む、続いて中獅子が入って舞い、更に大獅子が加わり、全員舞場の中央で舞う。

(三) 中のトーラリー

獅子は内側に向かって輪を作りその外側の定位置にササラが立ち曲に合わせて鯨を摺る。そして歌笛及び歌があり、獅子と縄追いは夫々ササラ子とササラ子の間に位置する。

牝獅子は牡丹の花笠の位置

中獅子は月の花笠の位置

大獅子は日の花笠の位置

歌詞 この獅子は悪魔を払う獅子なれば、げばも恐れて、角がもげそろ

○廻り獅子

牝獅子は、楽しく牡丹の花園で舞い遊んでいる。中獅子と大獅子は、ササラ子の外側で互いに腕を競っている。

○花がかり

中獅子は、牝獅子を見付けて花園に入り共に楽しく舞い遊ぶ。

○引回し

牝獅子と中獅子が舞い遊んでいる所へ大獅子が割込み乱闘して中獅子を倒す。

そして牝獅子と舞い遊んでいるうちに、中獅子がすきを見て大獅子に襲いかかったが、また倒され意識不明となる。

やがて蘇生した中獅子は、また大獅子を襲い今度は中獅子が勝つが、牝獅子の無言の調停によって和解する。

(四) 終のトーラリー

すっかり仲よくなった三頭の獅子は、和やかに終日を舞い遊ぶ。

(ここで歌が入る)

太鼓の胴をきりのと締めて、ササラをさっと摺りかえしゃいな・・・

(五) 曳き(引) 笛

最初の一曲は、縄追いを中心にして舞い、次第に向きを変えて、舞場を一周して退場する。最後に棒使いが舞場の浄めを行って、舞を終了する。

出典：岩崎獅子舞保存会作成の解説資料

山口民俗資料館 勉強会

「山口の自然と歴史」連載のきっかけとなったのが山口民俗資料館の訪問でした。民俗資料館では、年間5～6回、勉強会が開かれ、大勢の歴史好きの皆さんが集まります。勉強会の開催予定日は「さわやか」の催し物案内にも掲載しております。

身近な歴史を学ぶ 山口民俗資料館 勉強会

11月13日(木)、山口民俗資料館において、玉井康夫氏を講師に招き、「富岡製糸場と絹産業遺産群」をテーマにした勉強会が行われました。

「かつて、所沢は織物の町でもあった。富岡製糸場と絹産業遺産群の世界遺産登録は、群馬県だけでなく、所沢市を含めた武蔵野も大きく関係している。」と前置きされて、学習が始まりました。明治初期の繊維・織物に関するさまざまな人について、そして、それらの人のつながりについてまでも話が及び、ときおり雑談も交えながら和やかで、有意義な勉強会でした。

山口民俗資料館の勉強会では、あまり知られていない身近な歴史を学ぶことができるので、たいへん好評です。



量の部屋で和やかに
第9号(平成26年12月26日発行)

身近な歴史を学ぶ 山口民俗資料館 勉強会 (その2)

毎月行われている好評の山口民俗資料館勉強会。12月11日のテーマは「岩崎鯨獅子舞の起源と伝承」でした。

今回は、所沢生まれで、岩崎下町在住の塚田順子氏を講師に招いて勉強会が行われました。塚田氏は父の影響で鯨獅子舞にふれ、「男の子であれば」と何度か思っていたそうです。そして、泉小の講座「名人に学ぶ」の中で「岩崎鯨獅子舞」を紹介するなどして、伝承、後継者の育成に努力しています。

今回の勉強会では、ビデオを見ながらの解説や、笛の演奏。また、舞を舞う人たちの苦労話や裏話など、とても興味深く、充実した内容でした。そして、今年の「岩崎鯨獅子舞」を見るのが楽しみになる勉強会でした。

4月勉強会の御案内 テーマ「古文書にみる火事騒動の始末」

日時：4月9日(木) 10時～12時 講師：小山裕氏 参加費：200円



苦労話や裏話も聞くことができました
第10号(平成27年2月28日発行)

山口郷土民俗資料館の勉強会から広がる歴史の仲間 開館20周年記念行事「新田義貞旗上げの地を訪ねる旅」に40名が参加

3月8日(火)、「新田義貞旗上げの地を訪ねる旅」(主催：山口郷土民俗資料館、協賛：広報委員会)が実施されました。この旅は、昨年10月に、広沢謙一先生(元狭山市史編さん委員、山口在住)を講師に招いて開かれた山口郷土民俗資料館勉強会『新田義貞鎌倉攻めの道』(副題 生品神社から所沢まで)において、ぜひ現地を見学したいという多数の意見が出たために企画されたもので、あっという間に定員の40名が集まりました。27年度は山口郷土民俗資料館の開館20周年に当たり、その記念行事でもあります。

目的地は群馬県太田市の新田荘(にったのしょう)。広沢先生の分りやすい説明を聞きながら、新田荘歴史資料館、世良田東照宮、長楽寺、生品神社、大光院を巡りました。新田義貞がこの生品神社で旗揚げし、日本の歴史が大きく変わる発端となったこと、途中、山口で陣取ったことなど、700年近い昔に想いを馳せながら、一步一步を踏み締めて歩きました。帰りのバスの中では、歴史の話題でおおいに盛り上がり、鎌倉を訪ねる旅を早く企画して欲しいという意見も出ました。無事まちづくりセンターに到着後、しっかり勉強した充実感と楽しい思い出を土産に、それぞれの家路につきました。



生品神社 新田義貞の銅像前で

第17号(平成28年4月30日発行)

民俗資料館勉強会 山口城の堀跡を探索

6月19日(日)、恒例となった山口民俗資料館の勉強会が開かれました。演題は「山口城址は私達に何を語るか」、講師は所沢市埋蔵文化財調査センターの安藤隆先生です。

座学の後、10回にも及ぶ発掘調査が行われた現場を巡り、中世に築かれた堀跡や、古墳時代から江戸時代にいたる様々な埋蔵遺跡について学びました。普段よく見慣れた場所ですが、思わぬ発見がたくさんありました。



遠い昔を偲びながら説明を聞く

第19号(平成28年8月31日発行)

新田義貞の足跡を辿り鎌倉へ 民俗資料館勉強会の研修旅行

11月25日(金)、山口郷土民俗資料館の主催で研修旅行「新田義貞鎌倉攻めの道：山口～鎌倉」が実施されました。3月に実施した「旗上げの地を訪ねる旅」の参加者の強い要望により、続編として企画されたものです。

参加者は皆、広沢謙一先生の明快な説明を聞きながら、元弘3年(1333)にタイムスリップし、府中の大國魂神社、稲村ヶ崎、北条高時自決やぐらなど、義貞の鎌倉攻めの足跡を辿りました。帰りのバス車中では、早くも次の企画を期待する声が出ていました。



鶴岡八幡宮、大イチョウの前で
歴史好きの皆さん笑顔いっぱいです。

第21号(平成28年12月28日発行)

山口まちづくり推進協議会だより
さわやか 特集号
行ってみよう **山口の自然と歴史** もっと知ろう！

平成29年3月31日発行

発行者 山口まちづくり推進協議会会長 本橋源一

編集者 山口まちづくり推進協議会 広報委員会

印刷 株式会社 芳林堂

広報委員会メンバー（平成29年3月31日現在）

新居亨一 委員長 地域環境部会

神藤年三 副委員長 地域コミュニティ部会

前田克夫 地域福祉部会

川崎幸美 青少年育成部会

遠藤健志 学習文化部会

事務局 山口まちづくりセンター



みどりと水鳥の里

YAMAGUCHI